

昭和天皇九州行幸とホテル開業の関係

The Relation Between the Emperor's Visit to Kyusyu And Hotel Opening in Showa Period

中村国際ホテル専門学校

中 村 哲・牧 一 郎

中村学園大学 流通科学部

甲 斐 論

1. はじめに

昭和天皇（裕仁天皇）は太平洋戦争直後の1946年に人間宣言を行い、その後1946年から1987年にかけて日本全国を行幸した。各地ではその受入れのためにホテルを含むさまざまな宿泊施設が準備された。

本論文では、特に九州における昭和天皇行幸時の宿泊施設を調査し、終戦直後からその後の高度成長経済期などを経て施設がどのように変化していったかを明らかにし、この時期のホテル業の変化について論じたい。また、昭和天皇の宿泊という極めて特殊な利用のために宿泊施設がどのように対応したかを調べて、ホテル業の特殊性を論じたい。

2. 昭和天皇行幸の目的

昭和天皇が太平洋戦争の終結以降に九州へ行幸したのは13回であり、その目的は大きく分けて次の4種類である。⁽¹⁾

- ①1946年から1954年にかけての戦災復興状況
全国視察の一環としての1949年の九州行幸
- ②秋季国民体育大会（以下、国体と略す）の
開会式臨席
- ③全国植樹祭（以下、植樹祭と略す）の開会
式臨席
- ④1961年の佐賀県・長崎県視察

このうち、1949年の戦災復興状況視察と1979年の国体（宮崎県）、1984年の国体（鹿児島県）、1985年の植樹祭（熊本県）、1987年の植樹祭（佐賀県）の5回においては皇后を同行しない行幸であったが、それ以外の8回においては皇后を同行する行幸啓であった。本論文では行幸及び行幸啓を総称して行幸と記す。

なお、1948年の福岡県における国体の開会式については行幸は行われず、1987年の沖縄県における国体の開会式については皇太子・皇太子妃が天皇・皇后の名代として臨席している。

3. 昭和天皇九州行幸の宿泊施設

表1に昭和天皇の九州行幸の宿泊施設を記す。戦前の九州においてホテルは福岡市などの大都市や雲仙、阿蘇といった国際的な観光地にわずかにあるのみであった。このうち、都市のほとんどのホテルは戦災により失われた。そのため、1949年の行幸において宿泊施設として使用されたホテルは1917年開業の九州ホテル（雲仙）のみであった。それ以外の施設としては戦災を免れた戦前からの旅館が主に使われた。また、企業内の施設や県知事公舎、あるいは各地の名士の私邸に宿泊した例もある。この年の福岡市への行幸の際、福岡市郊外の二日市温泉の大丸別荘（旅館）が宿泊施設として利用されている。

表 1 昭和天皇の太平洋戦争終結以降の九州行幸の宿泊施設

行幸の目的 (実施年)	宿泊日 (チェックイン日) 及び宿泊数	宿泊施設		摘要 (施設の種類、開業年等)
		施設名	所在地	
戦災復興状 況視察 (1949年)	5月18日、2泊	日本製鉄高見倶楽部	北九州市	企業内施設 1928年竣工
	5月20日、2泊	大丸別荘	筑紫野市	旅館 1865年開業
	5月22日、1泊	揚柳亭	佐賀市	料亭 1882年開業
	5月23日、1泊	春慶屋	武雄市	旅館 1870年頃の開業
	5月24日、1泊	山水楼	佐世保市	旅館 廃業
	5月25日、2泊	九州ホテル	雲仙市	ホテル 1917年開業
	5月27日、1泊	三菱造船所貴賓館(占勝閣)	長崎市	企業内施設 1904年竣工
	5月28日、1泊	樋口軒	筑後市	旅館 1886年開業
	5月29日、1泊	熊本県知事公舎	熊本市	
	5月30日、1泊	望洋閣	天草市	旅館 1935年開業
	5月31日、1泊	松濱軒	八代市	肥後熊本藩家老の松井家邸宅
	6月1日、2泊	岩崎谷荘	鹿児島市	旅館 廃業
	6月3日、1泊	平田邸	鹿屋市	民家
	6月4日、2泊	紫明館	宮崎市	旅館 廃業
	6月6日、1泊	喜せつ園	延岡市	旅館 廃業
	6月7日、2泊	日名子旅館	別府市	旅館 廃業 1850年代創業
6月9日、1泊	竹内八三郎邸	日田市	民家	
6月10日、1泊	日本製鉄高見倶楽部	北九州市	企業内施設 1928年竣工	
大分植樹祭 (1958年)	4月7日、2泊	白雲山荘	別府市	廃業 1948年創業
	4月9日、1泊	宮崎観光ホテル	宮崎市	1954年開業
	4月10日、3泊	岩崎谷荘	鹿児島市	旅館 廃業
	4月13日、1泊	熊本県知事公舎	熊本市	
	4月14日、2泊	阿蘇観光ホテル	阿蘇郡南阿蘇村	1939年開業 行幸の前に大改修
	4月16日、1泊	西日本工業倶楽部	北九州市	旧松本邸 1912年竣工
	4月17日、1泊	博多帝国ホテル	福岡市	1954年開業
熊本国体 (1960年)	10月21日、4泊	熊本ホテルキャッスル	熊本市	1960年開業
佐賀・長崎 視察 (1961年)	4月19日、1泊	佐賀県知事公舎	佐賀市	
	4月20日、1泊	金子道雄邸	唐津市	唐津市長私邸
	4月21日、1泊	和多屋別荘	嬉野市	1950年開業
	4月22日、1泊	山水楼	佐世保市	旅館 廃業
	4月23日、1泊	矢太楼	長崎市	ホテル 1954年開業
大分国体 (1966年)	10月21日、3泊	杉乃井ホテル	別府市	ホテル 1944年開業
	10月25日、2泊	九重レークサイドホテル	由布市	1965年開業 廃業
	10月27日、1泊	阿蘇観光ホテル	阿蘇郡南阿蘇村	1939年開業 廃業
	10月28日、1泊	熊本ホテルキャッスル	熊本市	1960年開業

長崎国体 (1969年)	10月24日、1泊	矢太楼	長崎市	ホテル 1954年開業
	10月25日、2泊	小浜観光ホテル	小浜温泉	明治22年開業「一角楼」として開業 現「浜観ホテル」
	10月27日、1泊	福江国際会館迎賓館	福江市	現「福江文化会館」
	10月28日、1泊	弓張観光ホテル	佐世保市	現在「弓張の丘ホテル」1969年頃開業
	10月29日、2泊	旗松亭	平戸市	ホテル 1969年開業
鹿児島国体 (1972年)	10月20日、3泊	城山観光ホテル	鹿児島市	1963年開業
	10月23日、1泊	指宿観光ホテル	指宿市	現「指宿いわさきホテル」1956年開業
	10月24日、1泊	城山観光ホテル	鹿児島市	1963年開業
	10月25日、2泊	奄美東急観光ホテル	奄美大島	1971年11月10日開業 現在は廃業
宮崎植樹祭 (1973年)	4月6日、1泊	宮崎観光ホテル	宮崎市	1954年開業
	4月7日、1泊	えびの高原ホテル	えびの市	1958年開業 現「国民宿舎 えびの高原荘」
	4月8日、1泊	島津久厚邸	都城市	個人邸宅
	4月9日、1泊	シーサイドホテルフェニックス	宮崎市	
	4月10日、1泊	都井岬観光ホテル	串間市	1964年開業 廃業
	4月11日、1泊	国民宿舎青島	宮崎市	廃業
	4月12日、1泊	カーフェリー「せんとぼーりあ」		1971年竣工 解体
佐賀国体 (1976年)	10月22日、3泊	ホテルニューオータニ佐賀	佐賀市	1976年開業
宮崎国体 (1979年)	10月13日、3泊	宮崎観光ホテル	宮崎市	1954年開業
鹿児島植樹祭 (1984年)	5月18日、1泊	城山観光ホテル	鹿児島市	1963年開業
	5月19日、2泊	ホテル林田温泉	霧島市	現「霧島いわさきホテル」1931年開業
熊本植樹祭 (1985年)	5月10日、1泊	ニュースカイホテル	熊本市	1968年開業 現「ANA クラウンプラザホテル熊本ニュースカイ」
	5月11日、2泊	阿蘇観光ホテル	阿蘇郡南阿蘇村	1939年開業 廃業
佐賀植樹祭 (1987年)	5月22日、1泊	ホテルニューオータニ佐賀	佐賀市	1976年開業
	5月23日、1泊	和多屋別荘	嬉野市	1950年開業
	5月24日、1泊	唐津シーサイドホテル	唐津市	1936年開業

出所：西日本新聞、佐賀新聞、長崎新聞、熊本日日新聞、大分合同新聞、宮崎日日新聞、南日本新聞より作成

これは、戦災の影響で福岡市においては天皇が宿泊するのに適した宿泊施設がホテルのみならず旅館すら無かったためと考えられる。

1958年の植樹祭（宮崎県）の際、初めて戦後に開業されたホテルである宮崎観光ホテルと博多帝国ホテルが利用された。このうち、宮崎観光ホテルについては、この時期から新婚旅行先や企業等の団体旅行先として宮崎が注目され始

め、その宿泊施設という観光業の一部として開業した。しかしながら、大都市におけるホテル宿泊の需要はまだ小さく、そのため博多帝国ホテルにおいては後述するように天皇宿泊という特殊な目的のために開業している。また、この2都市を除くと依然として戦前からの旅館や知事公舎（熊本）等のホテル以外の施設が宿泊に利用された。

1960年代以降から1970年代前半にかけて、熊本ホテルキャッスル、矢太楼、九重レークサイドホテル、弓張観光ホテル、城山観光ホテルなど、主要都市や観光地で数多くのホテルが開業していくが、この時期のホテル開業の中心は都市ではなく観光地であった。そのため、佐賀市、唐津市、都城市においては、行幸宿泊施設としてはホテルではなく県知事公舎やそれぞれの都市の名士私邸に宿泊している。

1970年代後半以降は行幸における宿泊施設としては嬉野温泉の和多屋別荘の1例を除いてすべてホテルが利用されるようになっていった。

写真1 1958年の天皇・皇后の鹿児島視察を報じる新聞号外⁽²⁾



写真2 1958年、天皇・皇后の鹿児島での宿泊施設「岩崎谷荘」についての新聞記事⁽³⁾



4. 天皇宿泊のために建設されたホテル

前項で記した戦後に開業した天皇宿泊ホテルのうち、天皇の宿泊が建設の大きな目的のものが複数ある。以下、それらについて詳述する。

①博多帝国ホテル^{(4) (5) (6)}

博多帝国ホテルは帝国ホテル（東京都）の系列ホテルとして1954年3月15日に開業した。帝国ホテルは東京・内幸町の本店のほか、日本アルプスに上高地帝国ホテルを運営していて、1950年代はこれら以外の系列ホテルの経営はしない方針であった。

しかし、同ホテルの社外取締役であり、また資金融資企業でもある東邦生命の太田清蔵氏（5代目）の強い要請により博多帝国ホテルを開業することとなった。

東邦生命社長であった太田清蔵の先代は福岡市の醤油商店の出身であり、太田清蔵氏（5代目）は福岡市の発展に尽力した。その一環として、地上8階地下2階の当時としては西日本一の規模となる東邦生命福岡ビルディングを建設し、6階までは博多大丸デパートとし、7階及び8階を博多帝国ホテルが使用することとした。

博多帝国ホテルは皇室やその他の要人の福岡における宿泊施設としてつくられた。その概要を表2に示す。運営会社の株式会社博多帝国ホテルは資本金の40%ずつを帝国ホテルと東邦生命が出資している。

占有面積は4,075㎡(1,235坪)で、7階にはフロント及びロビー、宴会場4室、ランチルーム、ダイニングルーム、コーヒーショップ、バー、結婚式場及び控室、厨房が設置された。また、8階は客室フロアで、すべてバス付きの客室48室が設けられた。客室の1室が貴賓室と呼ばれ

た部屋で、皇室が宿泊されることを目的としてつくられ、一般客の宿泊は無かったという。

昭和天皇が宿泊されたのは1958年4月17日の1泊だけであるが、その他の行幸の際にも福岡空港から帰京の前の休憩所として利用されている。

博多帝国ホテルは1969年7月に閉鎖された。その理由としては福岡市内に近代的なホテルとしての西鉄グランドホテル(1969年4月開業)、博多東急ホテル(1969年5月開業、現西鉄イン福岡)の開業などが挙げられる。

表2 博多帝国ホテルの運営会社である株式会社博多帝国ホテルの概要

設 立 日	1953年10月
資 本 金	15,000,000円
株 主	帝国ホテル6,000,000円 東邦生命6,000,000円 その他3,000,000円
設立時役員	取締役社長 犬丸徹(帝国ホテル社長)、専務取締役支配人 久富慶太郎 取締役 高田賢

表3 博多帝国ホテルの概要

開 業 日	1954年3月15日
廃 業 日	1969年7月
場 所	福岡市上呉服町5 東邦生命福岡ビルディング7階及び8階
占有面積	4,075㎡(1,235坪)
主な施設	(7階) フロント及びロビー、宴会場4室、ランチルーム、ダイニングルーム、 コーヒーショップ、バー、結婚式場及び控室、厨房 (8階) 客室48室

写真3 博多帝国ホテルが入っていた東邦生命福岡ビルディング



写真提供：鹿島建設株式会社

写真4 博多帝国ホテルのフロント



写真提供：鹿島建設株式会社

写真5 博多帝国ホテルの客室



写真出所：博多帝国ホテル・リーフレット

写真6 博多帝国ホテルの宴会場



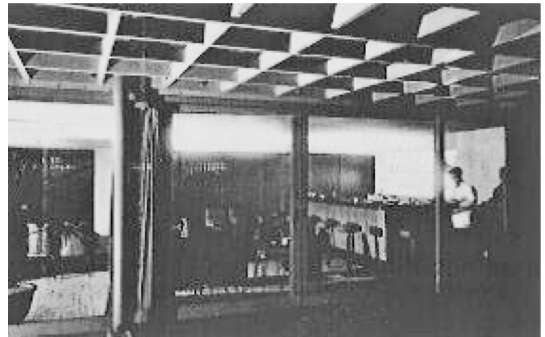
写真出所：博多帝国ホテル・リーフレット

写真7 博多帝国ホテルの食堂



写真出所：博多帝国ホテル・リーフレット

写真8 博多帝国ホテル バー



写真出所：博多帝国ホテル・リーフレット

②熊本ホテルキャッスル⁽⁷⁾

熊本ホテルキャッスルは熊本の観光及び文化経済の振興を図るとともに、1960年の熊本県で開催された国体開会式に臨席のために行幸される天皇の宿泊を目的として1960年10月16日に開業した。熊本ホテルキャッスルの運営会社である熊本振興株式会社の創立総会における創立事項報告書には昭和天皇の宿泊について以下のような記載がある。

「尚ホテル建設については本年十月下旬には国体も挙行せられる関係もあり出来得れば其れ迄に竣工の上、両陛下のご宿泊所として奉仕することもあり得ると考へ竣工の必要あるため己に一部着工して居ります。」

このホテル以前には熊本市には近代的設備を

有するホテルは無かった。昭和天皇は戦後、1949年及び1958年に熊本市を訪問しているが、いずれも熊本県知事公舎に宿泊している。このホテルの開業に当たっては表4に示すとおり数多くの熊本財界人が出資し、また役員に就任している。

ホテルの建設工事は天皇宿泊に間に合わせるため1960年4月15日の熊本振興株式会社の会社創立を待たずに着工している。しかも、用地は会社創立発起人の増永茂巳らが所有していたが、まだ正式な買収契約も完了していない中での着工であった。

竣工は営業開始日の前日の1960年10月15日で、開業6日目の1960年10月21日から25日まで4泊5日、昭和天皇・皇后が宿泊している。

表4 熊本ホテルキャッスルの運営会社である熊本振興株式会社の概要

設立日	1960年4月	
資本金	50,000,000円	
株主	(2) 以下の発起人17名が各1,000,000円 計17,000,000円 株式会社出田金物店代表取締役 出田敬七郎 井関新市 上田滋穂 上野景治 株式会社肥後銀行取締役頭取 川田栄三 株式会社古荘本店代表取締役 金沢大四郎 株式会社肥後相互銀行代表取締役 坂井光生 田村颯三郎 長野簡悟 九州産業交通株式会社代表取締役 野上進 野田和之 藤井輝彰 増永茂巳 株式会社熊本相互銀行代表取締役 山内栄吉 株式会社山内本店代表取締役 山内忠次郎 熊本トヨタ自動車株式会社代表取締役 与縄忠雄 吉村合名会社代表社員 吉村常助 (2) 一般公募 33,000,000円	
設立時役員	代表取締役社長 吉村常助 取締役 出田敬七郎 取締役 上田滋穂 取締役 河津寅雄 取締役 長野簡悟 取締役 野田和之 取締役 藤井輝彰 取締役 山内忠次郎 常務取締役 相原和幸 監査役 山内栄吉 顧問 伊豆富人 顧問 片岡武士修 顧問 迫静二 顧問 森本貫一	取締役会長 坂内義雄 取締役 上野景治 取締役 金沢大四郎 取締役 田村颯三郎 取締役 野上進 取締役 平塚泰蔵 取締役 増永茂巳 取締役 与縄忠雄 監査役 川田栄三 監査役 坂井光生 顧問 井関邦三郎 顧問 熊谷栄次 顧問 本田弘敏

表5 熊本ホテルキャッスルの開業当初の概要

開業日	1960年10月16日
場所	熊本市城東町21番地 (旧第一高校跡地)
建物	地上4階地下1階建
主な施設	客室35室、結婚式場1室、宴会場2室、レストラン3、バー1
支配人	相原和幸

写真9 1960年10月に熊本ホテルキャッスルに 宿泊された昭和天皇・皇后



写真提供：熊本ホテルキャッスル

③旗松亭

旗松亭は1969年の長崎県で開催された国体の相撲競技の観戦のために平戸に行幸される天皇・皇后が宿泊されたホテルである。

経営者の木下吉太郎は長崎市の生まれで戦前の大相撲で「米乃花」という四股名で十両にまでなっている。太平洋戦争に出征するため引退。戦後は長崎師範学校（現長崎大学教育学部）の相撲の指導の後、平戸市にある長崎県立猶興館高等学校で相撲の指導をすることとなった。平戸市では映画館及び旅館「米乃屋」を経営する。また平戸市議会議員を1959年から1983年まで6期務め、1967年から1971年まで市議会議長も務めた。さらに長崎県相撲連盟理事長も務めた。

1969年の長崎県での国体において平戸での相撲競技の開催が決定後、昭和天皇の宿泊施設が問題となった。昭和天皇は相撲観戦が趣味であり、それまでの国体でも数多く相撲競技を視察している。そのような中で、市議会議長及び長崎県相撲連盟理事長を務めていた木下吉太郎が平戸市に新しく建設を計画中であった自社のホテルの設計を変更し、当初は一般の客室の予定であった3室を貴賓室1室にし、ここを昭和天皇の宿泊に充てることとなった。⁽⁸⁾

ホテル名は「旗松亭」とした。これは建設用

地を十条製紙初代社長を務めた平戸出身の西済から購入した際、売買の条件としてホテル名を「旗松亭」とすることが含まれていたためである。「旗松亭」は平戸の豪族であった西家のこの地に所有していた建物の名前であった。

ホテル開業の実務は木下吉太郎の長男で専務を務めていた木下優が担当する。4階建、延床面積2579.19㎡、客室数33室のホテルは昭和44年8月に開業する。女将には木下優の妻である木下洋子が就任。また、雲仙のホテルからサービス経験者3人を雇い入れた。この開業と同時期に米乃屋は売却され、またその2年後に映画館も廃業している。

昭和天皇・皇后は開業2か月後の旗松亭に1969年10月29日から2泊し、国体相撲競技の視察のほか、平戸市内を視察した。10月31日に旗松亭の従業員が玄関に整列して天皇・皇后を見送る際、木下吉太郎が万歳を唱えた。

その後、旗松亭は平戸観光の活況の中、修学旅行や企業の社員旅行、その他の団体旅行や新婚旅行客を数多く受け入れ、客室数を増やしていった。（1987年に客室を117室に増設。現在の客室数は90室）

また、2002年の全国豊かな海づくり大会臨席の今上（平成）天皇・皇后が宿泊されているなど、数多くの皇族が宿泊している。また、1990年にはオランダのウィレム・アレキサンダー皇太子も宿泊している。

その後、1977年の平戸大橋の完成により平戸へは日帰り観光客が増加し、宿泊客は減少していった。さらに、新婚客や団体客も激減し、平戸観光が低迷していくとともに、旗松亭の経営も厳しくなっていた。その結果、2016年2月に民事再生法の適用を申請している。

④ホテルニューオータニ佐賀⁽⁹⁾

ホテルニューオータニ佐賀は1976年の佐賀県で開催された国体開会式に臨席のために行幸される天皇の宿泊を主目的として開業したホテル

である。国体が佐賀で開催されることが決まったとき、佐賀市にはシティホテルと言えるホテルは無かった。そこで、当時の池田県知事は佐賀県出身で九州電力株式会社社長の永倉三郎にホテル建設を相談する。永倉は佐賀財界や佐賀県出身の市村清（1900～1968）が創業したリコー三愛グループに働きかけ、ホテル開業のための佐賀振興株式会社を1975年5月に設立した。同社の株主を表6に、役員を表7に示す。

この佐賀振興株式会社の経営によりホテルが開業することになった。運営について同社はいくつかの既存の国内トップクラスのホテルに打診するが、佐賀市という地方小都市での高級シティホテルの運営については経営的に厳しいと

いうことで多くのホテルが辞退した。その中で、唯一、ホテルニューオータニが運営を引き受けることとなった。

ホテル建設用地は佐賀県食糧株式会社が所有する佐賀市与賀街の土地3,318㎡を50年間の賃貸契約で使用することとし、その上に佐賀振興株式会社がホテル建物を建設することとした。建設用地は容積率が200%で小さく、十分な建物ができないという問題があったが、佐賀県が同地の容積率を400%まで引き上げることによって9,369㎡のホテルの建設が可能となった。建物の建設工事は、設計を世界的な建築家として有名であった黒川紀章（株式会社黒川紀章建築都市設計事務所）が担当し、施工は住友建設株

表6 佐賀振興株式会社設立時の株主

株主名	所有株式数
(株) 佐賀玉屋代表取締役 田中丸善次郎	20,000株
(株) ホテルニューオータニ代表取締役社長 大谷米一	100,000株
九州電力(株) 代表取締役社長 永倉三郎	100,000株
佐賀県食糧(株) 取締役社長 横尾正二	60,000株
昭和自動車(株) 取締役社長 金子道雄	20,000株
岩尾磁器工業(株) 取締役社長 岩尾新一	20,000株
バンボード(株) 取締役社長 嶺川公利	20,000株
(株) リコー取締役社長 館林三喜男	60,000株
住友建設(株) 斎藤武幸	50,000株
松尾建設(株) 松尾文雄	50,000株
(株) 佐賀銀行取締役頭取 香月義人	30,000株
佐賀電気工業(株) 永倉真一郎	26,000株
(株) 佐賀相互銀行 宮副新一	20,000株
祐徳自動車(株) 愛野興一郎	20,000株
(株) 西島製作所 原田龍平	20,000株
佐賀板紙(株) 梶原景光	10,000株
(株) 福岡商店 福岡日出磨	10,000株
理研農産加工(株) 鶴池四郎	10,000株
佐賀魚(株) 水上久吾	10,000株
九州新菱冷熱(株) 古川弥作	6,000株
久光製薬(株) 中富正義	4,000株
(株) 佐賀新聞社 中尾清澄	4,000株
小原嘉登次 ((株) 和多屋別荘取締役会長)	20,000株
池田直 (佐賀県知事)	10,000株
計	700,000株

表 7 佐賀振興株式会社設立時の役員

役職名	氏名	摘要
代表取締役社長	田中丸善次郎	(株) 佐賀玉屋代表取締役
専務取締役	池沢金次郎	(株) ホテルニューオータニ取締役
常務取締役	谷口弘	九州高原開発 (株) 常務取締役 (九州電力系ホテル会社)
取締役	岩尾新一	岩尾磁器工業 (株) 取締役社長
取締役	大谷米一	(株) ホテルニューオータニ代表取締役社長
取締役	岡田吉三郎	(株) ホテルニューオータニ取締役副社長
取締役	小原嘉登次	(株) 和多屋別荘取締役会長、佐賀県議会議長
取締役	金子道雄	昭和自動車 (株) 取締役社長
取締役	館林三喜男	(株) リコー取締役社長
取締役	永倉三郎	九州電力 (株) 代表取締役社長
取締役	横尾正二	佐賀県食糧 (株) 取締役社長
監査役	香月義人	(株) 佐賀銀行取締役頭取
監査役	坊城俊文	(株) ホテルニューオータニ常務取締役

式会社と松尾建設株式会社が担当した。

同ホテルは1976年9月1日に開業した。同日の佐賀新聞は6ページをこのホテルの開業記事及び広告に充てている。開業19日目の1976年9月19日から夏季国体開会式に臨席するために佐賀に来訪していた皇太子・同妃が同ホテルに宿泊している。昭和天皇は開業2か月目の1976年10月22日から3泊し、1987年5月に佐賀県で開催された全国植樹祭の際の行幸時にも1泊している。

ホテルニューオータニグループに関してはホテルニューオータニ佐賀開業の2年後の1978年9月にホテルニューオータニ博多を開業している。そして、1985年にホテルニューオータニ佐賀の経営を佐賀振興株式会社からホテルニューオータニ博多が引き受けることとなり、佐賀振興株式会社は解散した。

5. その他の宿泊施設の天皇宿泊に対する準備

前記の天皇宿泊のために開業したホテル以外でも、天皇宿泊のために大規模な改修工事等を行った既存の宿泊施設は多い。そのいくつかを以下に記す。

①岩崎谷荘

1958年に宿泊の際、化粧室、湯殿を新設。ま

写真10 ホテルニューオータニ佐賀の開業を報じる佐賀新聞⁽¹⁰⁾



た、寝室と居間については銘木を使うなどの改修を行っている。⁽¹¹⁾

②佐賀県知事公舎

1961年に宿泊の際、洗面所、浴室等を新築。

寝室は柱以外はすべて改修。改修費520万円。⁽¹²⁾

③金子道雄邸

1961年に宿泊の際、唐津市長で昭和自動車社長であった金子道雄は佐賀県知事の依頼を受けて自宅を宿舎に提供することとなった。その際、特に浴室及び炊事場を大改修している。また車庫を新設した。^{(12) (13)}

④和多屋別荘

1961年に宿泊の際、特別貴賓室「洗心」のイス、テーブル、ステレオ、テレビ、ラジオを新設。特別料理室、渡り廊下、天皇・皇后のみが使用する佐賀県産品室などを新築。さらに仲居たちの制服も新調。⁽¹²⁾

6. まとめ

昭和20年以降、昭和天皇は九州に合計13回行幸した。この行幸における天皇宿泊施設から以下の点が明らかとなった。

①宿泊施設の変遷

1949年の行幸における宿泊施設は、1917年開業の九州ホテル（雲仙）の1例を除き戦災を免れた戦前からの旅館、企業内宿泊施設、県知事公舎、各地の名士私邸といったホテル以外の宿泊施設であった。

1958年の行幸において初めて戦後に開業したホテルが宮崎と福岡で宿泊施設として使用されたが、この2都市を除くと依然として戦前からの旅館や知事公舎（熊本）等のホテル以外の施設が宿泊に利用された。

その後、一部の都市を除き宿泊施設にはホテルが多く利用されるようになり、1970年代後半以降は嬉野温泉の和多屋別荘の1例を除いてすべてホテルが利用されることになった。

②戦後の九州におけるホテル業の変化について

戦前の九州においてホテルは主要都市や国際的な観光地にわずかにあるのみであった。戦災により多くのホテルは失われ、戦後の間もない時期に建設されたホテルは宮崎などの観光地が主であった。それはまだ日本が経済復興にも至っ

ていなかったからである。そのため1940年代からこのような状況で天皇が宿泊できるホテルが無く、例えば福岡市においてもその状況は各地の名家の自宅や県知事校舎、企業の貴賓室等に宿泊することもあった。また、その後、日本の経済発展に伴い、各地のホテルが整備されていくが、その中のいくつかは天皇が宿泊することを主目的とするものであった。

③ホテル業の特殊性

ホテルは民間企業であり、本来はその経営目的は利潤の追求である。しかしながら、都市の顔とも言えるシティホテルの場合、さまざまな目的を持って開業している。その中で、戦後の昭和期においては天皇宿泊という利潤の追求とは異なる目的で開業したホテルがいくつかあった。また、旅館等においても天皇宿泊という名誉のために大規模な改修工事を行った例があった。

1980年代以降、各地にホテルが整備されていくとともに天皇宿泊目的のホテル開業は無くなっている。しかしながら、天皇宿泊のために改修工事等を行うことは近年において数多くの例を見ることができ、ホテル業の特殊性が無くなった訳ではない。

なお、宮内庁は昭和天皇の行動等の詳細を記録した「昭和天皇実録」を出版中である。現在、第九巻（1943年～1945年）までが発売されており、本論文が取上げた1949年以降に関しては今後出版の予定である。この書の出版が完成すると、昭和天皇の九州行幸についても更に詳細な事実が明らかになることと考えられる。

参考文献

- (1) 宮内庁。“昭和時代（戦後）における昭和天皇・香淳皇后の御活動状況について”。
<http://www.kunaicho.go.jp/kunaicho/ko-ho/taio/taio-h25-0403.html>（参照2016-12-20）
- (2) 天皇・皇后両陛下バンザイ（ご視察写真特集）。南日本新聞。1958-4-12。号外
- (3) 雨の夜をおくつろぎ。南日本新聞。1958-4-

12. 夕刊, p.1
- (4) 帝国ホテル. “帝国ホテルの120年”. 東京, 帝国ホテル, 2010, p100-101
- (5) 鹿島建設社史編纂委員会. “鹿島建設百三十年史上”. 東京, 鹿島研究所出版会, 1971, p445-446
- (6) 鹿島建設株式会社九州支社. “鹿島建設九州支店50年の歩み”. 東京, 鹿島出版会, 1998, p25-28
- (7) 熊本振興株式会社. “熊本振興株式会社創立事項報告書”. 1960-4-15
- (8) 旗松亭専務・木下優. “昭和44年の行幸について記入” (私信)
- (9) 佐賀振興株式会社. “ホテルニューオータニ佐賀事業計画概要” 1975-5
- (10) 市民のプラザ 待望の誕生 きょうオープン ホテルニューオータニ佐賀. 佐賀新聞. 1976-9-1. 朝刊, ホテルニューオータニ佐賀オープン特集 p.1-6
- (11) 両陛下をお迎えする④. 南日本新聞. 1958-4-5. 朝刊, p.7
- (12) 両陛下を待つ. 佐賀新聞. 1961-4-16. 朝刊, p.3
- (13) 唐津市経営企画部企画政策課. “唐津探訪 金子道雄 (2/2)”.